

慈円「略秘贈答和調百首」考

要旨

慈円には西山隠棲期に詠まれた「厭離欣求百首」「略秘贈答和調百首」という作品がある。前者については平成二九年度和歌文学会六月例会で口頭発表した「慈円の『二諦一如』についての考察」で取り扱ったので、本稿は「略秘贈答和調百首」という作品を取り扱いたい。

青蓮院本に拠れば、その内題の下に「本二八二首ツ、載之、其間哥一首斗程闕在之」の注記があり、本百首の呼称が贈答歌形態（二一首一对）に由来することが確認出来る。「略秘」とは浅略深秘の約であり、相反する二つの概念を対照させようとの意図の下に「贈答和調」という形態を取ったことが想像出来る。前稿⁽²⁾では、建暦三年「日吉百首」との間に一七首もの重複歌があること、建暦二年（一一二二）正月十六日の天台座主第三度目の就任を詠じた歌「逢ひがたき法に近江の山高み三たび来にける身をいかにせん」（三六七九・日吉百首二二八七）がその重複歌中に見出せることなどから、「略秘贈答和調百首」から「日吉百首」という進展過程を説明し、西山隠棲後の作品としての位置を明確にすることが出来た。しかし、その思想内容について深く踏み込めなかったので、「略秘贈答和調百首」（以下、本百首と呼称）を検討したい。

【キーワード】天台教学、二諦一如、西山隠棲期、厭離欣求百首、安然

* 石 川 一

一 略秘贈答和調百首と日吉百首

本百首には、次のような「二一首一对形態」の歌が収載されている。（本文・歌番号も青蓮院本を底本とする多賀宗隼編『校本拾玉集』に拠ることとする。適宜漢字を宛て、その場合は底本を振り仮名とした。濁点も稿者の私意。以下同様）

三悪の家には何か帰るべき出でにし物を五相成身（三六四〇）
（第三句「本二かくるへきトアリ、帰るへき歟」の校異。）

かならずよ夜半の煙と身をばなせ以字焼字の法の報いに
（三六四二）

（下部に「以之為遺戒」注記）

行ふに真の言をならばずは心に月の宿らざらまし（三五九九）
三六四〇番の「三悪の家」とは仏教語「三悪道」のことで「さんまく」とも言い、此の世での悪業により来世で落ちる地獄道・餓鬼道・畜生道を指す。「五相成身」は金剛界の大日如来に対す

る行者の精神作用の五段階の観想（五相）を完成させて、即身成仏を達成すること。三悪道にはどうして帰ることが出来ようか、出家したからには五相成身（即身成仏）を目指すべきだの意。

三六四一番歌の「夜半の煙」は茶毘に付す煙のことで、「旅の空夜半のけふりと上りなば海人の藻塩火たくかや見ん」（後拾遺・鞆旅五〇三 花山院）などに拠る。「以字焼字」は胎藏界の五輪成身観によるもので、本有の仏性を顕現せしむること。必ず我が身を夜半の煙と成すのだ、五輪成身の法の果報での意。

この五相成身観と五輪成身観、および三五九番歌「真の言」（「真言」の訓読）については後述したい。

これに対して、「日吉百首」では次のような重複歌が対応掲載されている。

今は世も迷も捨て六の道に帰らじ物を五相成身（二二八四）

（「世も迷も捨て」に見せ消ちで「よもまとひすて、し」の校異）

かならずよ夜半の煙と身をばなせ以字焼字の法のむくいに

（二二八五）

二二八五番歌には異同は無いが、二二八四番歌は、今はよもや世も迷妄も捨てて六道に帰るまいと思ふのに、そう思うなら五相成身を目指すの意。異文「よもまとひすて、し（世も惑ひも捨て、し）」では、此の世も心の乱れも捨ててしまつての意となる。

なお、「日吉百首」には前掲二二八七番歌「逢ひがたき」の他に、

次の二首も再録されている。

思はざりき命ながらの山にまたたびく法の花を見んとは

（二二一七）

三度来て又帰りぬる深山辺の露にしをる、身をいかにせん

（二二〇四）

二二一七番歌「思はざりき」の「ながらの山」は「（命）ながら」と近江の歌枕「長等山」を掛ける。思つてもみなかつたことだ、命そのままに長等山を越えてまた何度も天台座主となり仏法の花を見ようとはの意。

二二〇四番歌は深山の露に濡れてしまった我が身をどうしたらよいだろうかの意。此の歌を辞任後の詠と看做すことが出来れば、「日吉百首」跋文の校異（見せ消ち）「建曆二年壬申秋九月草之本」の底本表記「建曆三年癸酉待三春記一篇而已」（清書本）の内容を示しており、天台座主第三度めの就任の翌年建保元年（一一二二）正月十一日辞去以降の歌を詠じているから、清書本「日吉百首」の上限を示すものと言える。

二 「浅略深秘」という文言

次に「浅略深秘（せんりやくじんび）」という文言について、慈円の著述「續天台宗全書」（密教3）から拾つてみたい。校訂者三崎良周など天台宗典編纂所関係者に依る送り仮名と訓点を活かしながら、

私に読み下すことにする。略秘贈答とは浅略深秘の約であり、通り一遍の浅く簡略なものと、深遠な秘密の教えという二つの概念を対照させようという意図のもとに、「贈答和歌」という形態を取ったものと前述したが、本来は慈円の著述中に見える「四重秘釋」、すなわち浅略釋（表面的な解釈）・深秘釋（深い趣旨を見出す解釈）・秘中の深秘釋（表面的と深遠との両方を超えた解釈）・秘秘中の深秘釋（現象のほかに深遠なものはないと悟る解釈）に拠ると思われる。

①『秘相承集（ひそうじょうしゅう）』

*その時盧舎那仏、蓮華藏世界に在^{ましま}して、千萬億の化身の釈迦牟尼仏の與^{あま}に、心地戸羅淨行品を説きたまふ、菩薩法を教え菩提道を証る。此の初段は自証心地の戒法秘密を説く也。而して浅略深秘二義これ在り。浅略は文相の如し、梵網心地戒品の意これ在り。深秘は金剛界頂宗秘密の心地戒品を三密義（密教でいう身・口・意の三業。大日如来の悟りの境地。仏の身体と言語と心によって行われる行為は、凡慮のおよばぬ不思議な働きであるから、三密であるとする）に依って或はこれを説く。義決文その意分明也。

『秘相承集』の「相承」とは、仏の悟りの本質を師から弟子へと受け継ぐこと。

「心地戸羅淨行品を説き、菩薩法を教へ、菩提道を証る」という經文を例として、自証心地の戒法秘密を説く。浅略深秘の二義あると

した上で、浅略は經文の通りで梵網心地戒品の意があるとす。深秘は金剛頂宗秘密の心地戒品を三密義（密教でいう身・口・意の三業。大日如来の悟りの境地。仏の身体と言語と心によって行われる行為は、凡慮のおよばぬ不思議な働きであるから、三密であるとする）に依って説いている。

②『毘逝 別（下）』（表紙に「極深極秘、^{(秘)(秘)(秘)}、^{(秘)(秘)(秘)}、^{(秘)(秘)(秘)}」

*此の次聊か開悟の事を記すべし。一切諸人阿弥陀を以て後世菩提之本尊と為す。諸教讚ずる所多く弥陀に在り。故に西方を以て一准と為すとしかじか。是は或は四十八願（阿弥陀仏が過去世に法藏菩薩であった時に立てた願のこと）莊嚴淨土之心、最後の来迎十念（十たび仏を念ずること）具足（出家者の守る戒め）之義、あるは法藏菩薩の無上念王などの本願など、かくの如き事を以て基本と為すか。誠に以て浅略也。真言の行は尤も深秘之心を悟るべき也。今阿弥陀を以て無量寿と翻る。今の延命常住之義尤も符合すべし。報仏之智恵、虚空之月輪、蓮花部教主、成菩提之西方、妙觀察智之心、声塵得果之因、凡そ此の土にあらざるは、凡夫初心之行は何の淨土を欣求するやと。愚者は浅略の義を信じ、何ぞ況んや覺者は深秘の旨を悟らんやと。此の国の先に生まるるの後に、寂光海會（常寂光土に住む無量の大衆のこと。寂は真理の寂靜なることをいう。光は真智の光り照らすこと。すなわち理智の二徳）に傳入すべき也。

『毘逝 別』^④は、毘逝(びせい)なる書と区別するために「別」とされたもの。四十八願は、莊嚴浄土之心、最後の来迎十念、具足之義、あるは法蔵菩薩の本願などを基本とにして誠に浅略であるとする。真言の行は尤も深秘の心を悟るべきなりとする。傍線を引いた愚者は浅略の義を信じ、何ぞ況んや覚者は深秘の旨を悟ることができようかとする。

③『法華 別帖』(表紙「秘中深秘也、穴賢穴賢不可他見」)

* 懺法院を建立の後に、毎年勤と為して如法七ヶ日夜法華法を修せしめんと欲す。仍元久二年十二月八日之を始めたりぬ。件の法上中下の番三十人之中、密宗之人高位之輩、替替て大壇護摩壇等を修め、顕宗人不断経衆と為す。予開白す。此の時此の法を深く思惟するの間、日来安立之上、行法護摩等行用大略開悟了りぬ。凡そ大略四種之釋の中、浅略深秘に於いては、常に知る所之分際皆浅深有る也。今稟承(伝統的な方法)の上に私案を加え深く勤行す。右記す所は秘中深秘也。其の旨右の如く相違すべからず。今また開悟に依つて左に記す所は秘中深秘也。恐れと為す、恐れと為す。

『法華 別帖』^⑤は、慈円の長年にわたる法華研究の成果で、長い期間の書き継ぎ。大懺法院における法華法に於いて、密教の弟子に護摩を修せしめ、顕教の弟子に不断説経衆にあてている。また先述の「四重秘釋」を紹介して、稟承の法に私案を加えて、秘中の深秘の法を

行ずる旨を明らかにしている。

④『四帖秘決』四帖秘決篇目 私 鎮和尚御口伝 慈賢筆 篇目道

覚親王真蹟也

* 一・二六二「法華法事」

仰せて云く。此の法は諸法の義理を含有せり。先行法は三部の大法(大日経・金剛頂経・蘇悉地経)を合せり。本尊は三身即一仏也。三身はまた三宝也。仏法僧次の如し。また教主釈尊は是仏法也。妙経と普賢とは是法僧也。但し法宝は言説なるが故に無體相に似たり。然れども今普賢菩薩即理の辺に約すれば、法華の體質是法宝のすがた也。事に約すればまた是僧宝也。

護摩本尊段、三身三戒等を誦て、釈迦普賢を並請する。是則三身を一身に具し、三宝を一法に収む。妙経の法宝の因果の二の質也。今の真言の中具に一乗の妙理を備え、故に八軸の妙文を縮めて三身の真言を用いる。是此の真言を誦て此の尊を供するは法華経を誦て法華経を供する也。勸請の詞にも此の事をば、本尊釈迦尊、妙法華経、普賢大聖尊と請すべき也。もし此の心に依らば、爐中に釈迦普賢座を並て、其の前に経卷を安ずと観るべきか。而して一の師説に黄紙朱軸の経としかじか 是浅略の義也

次に深秘の意を案るに、勸請の詞には妙法蓮花経と唱ふとも、ただ二尊外に別して経の體観置すべからざるか。今二尊已に本迹二門(本門とは、真の仏は久遠の昔に成道したものと、仏の本地・根源を

表す語で、迹門とは、この世に現れた仏は、本仏画衆生を導くために本地から迹を垂れたものとして、本仏の応現・垂迹を示す面をいう二質也。今の真言また八軸の肝心也。これに依つて此の真言を誦する妙経の功德自ら備はり。この尊を供する法花経の義理闕けること無し。是深く秘義と為すべきか。

『四帖秘決』⁽⁶⁾は慈円の口伝五百六十箇条を篇目ごとに記載したもので、この篇目は後鳥羽院皇子の道覚親王宸筆。「法花法事」として、真言の中具（つぶさ）に一乗の妙理を備え、故に八軸の妙文を縮めて三身（仏の三つの身体。法身・報身・応身）の真言を用いる。是真言を誦じて法花経を供するは浅略の義なりと断じる。次に深秘の意を案ずるに、今の真言また八軸の肝心なりとし、その真言を誦することに、妙経の功德自ら備わる。釈迦普賢菩薩の二尊を供するに、法花経の義理闕けること無く、深秘の義と為すべきかと結ぶ。

⑤ 同 右

*三・四七「熾盛光印事」

承元二年三月二十九日仰せて云く。真言教の大意、諸尊皆大日如来同體也といふ事は、学者存知大略一同也。但し具これを論ずるは、これに付て浅深有るべき也。所謂金輪・仏眼・尊勝・愛染・熾盛光等は是深也。観音・地藏・彌勒等の如きは浅也。此の心を以て餘尊を察するべし。また行法に付て浅深有るべし。所謂瑜祇経の行法は是深也。

此に入らざるは浅也。其の浅の手本には聖観音の軌也。その故は大日の一印を出づ。これを以て同體を表す。然れどもまた行法の首尾未だ必ずしも深秘を出でざる。瑜祇経に於いては始終秘旨を顕す。大日如来の己証也。然らば書を以て本と為して修行の分際浅深分明也。・・・瑜祇を以て本と為すといふは行位等の印をも結び、五輪五相等をも彼の秘秘中深秘の行法等也。此等の心を以て熾盛光の根本印の所には上件の深秘の意を結びあらはす也としかじか。・・・是は大日如来仏頂と現し給心也。釈迦大日両金輪同體の義也

⑤も同じく『四帖秘決』だが、「熾盛光印事」に真言教の大意として、諸尊皆大日如来同體なりとする。そして金輪・仏眼（ぶつげん）・尊勝・愛染・熾盛光等は深也とし、観音・地藏・彌勒は浅也とする。さらにその行法にも浅深ありとした上で、瑜祇経（ゆぎきょう）・ヨーガを行ずる人）の行法は深也と結ぶ。瑜祇経を以て本と為すといふは、行位等の印をも結び、五輪五相等をも加ふるは彼の秘秘中深秘の行法等也。此らの心を以て熾盛光の根本印の所には上件の深秘の意を結びあらはす也としている。

その他、跋文に「文治六年十一月」とある『自行私記』（和尚次第、外題云「八深秘」⁽⁷⁾）や、逆に「承久元年」執筆とされる『本尊縁起』⁽⁸⁾にも「浅略・深秘・秘中深秘、秘々中深秘」と見えるので、生涯を通して叡山教学における修法・内典などを四種に分類して呼んでいるこ

とは疑いないが、西山隱棲期に集中する著述に頻出していることは注目してよいと思われる。

三 五大院安然

ところで浅略深秘という文言を博搜するために、『續天台宗全書(密教3)』を読んでいると、五大院安然という僧侶の名前が頻出することに気付く。実は安然は慈円の師資筋にあたるが、彼の思想内容を簡略に説明することは難しく、要点だけを拾ってみたい。

①『秘相承集』

*今ノ經の題名、清淨法身毘盧遮那仏は、絶方処の中台法界體性智所具の五體(仏の五種の智恵)一體の大日也。故に此の經の正説段清淨法界の中の教主は、中台一智の説法也。大日經等は、内証五智一體一智の説法也。常世間の學者等、自性(それ自体の定まった本質)内証(内心の悟り)の分別これ無し。唯だ八葉を中台と一具に自性と思へる無下の事也。内証八葉の五智は中台自性の五智に他受用(衆生に悟りを享受させようという仏の側面)と成る也。餘教に無くは自受用(じじゅゆう・功德・利益を自ら受用し、その楽しみを自ら味わうこと)也。此の内証八葉の自受用色界頂に出づ。形貌他受用の形相。故に五大院、大日經教主他受用に現われ、自受用法門を説き釋する也。凡そ今の經は瑜祇經等を超ゆる也。瑜祇は秘密教の中の相對門の至極を説

く。其の故は両部を理智相對也。而して瑜祇經は理智相對して而不二極理を説く。故に煩惱即菩提。無明即法性の源奥。即時而真極秘。唯だ瑜祇經に在り。愛染染愛の秘密、仏眼部母極理、煩惱即菩提・菩提即煩惱。無明即法性・法性即無明の至極。併せて秘密相對門意也。而して秘密相對門に於いて、末代真言行者多く留滞有るべし。故に今の經に秘密絶對を説く。彼經の秘密相對を絶ゆる也。所謂此の經五大菩薩偈を説きて云ふ

①瑜祇經は、理智相對して不二極理を説くので、煩惱即菩提である。無明(煩惱のこと)は法性の源奥にあり、真に極秘である。それに基づいて、瑜祇經に、愛染染愛の秘密、仏眼部母極理とあり、煩惱即菩提・菩提即煩惱。無明即法性・法性即無明の至極なりとする。

②『別行經抄上』

*問ふ。密教の大旨大日の定印。其の説文右を以て左の上に置き、而して今何ぞ常途の密教之義に違ひするや。邪を以て正を押すの意甚だ不可也。如何。

答へ。問ふ、五大院和尚、陳隋の時、真言未だ来らざると雖も、此の疑を決して云ふ。天台大師定印口決に云ふ(安然記す)師云く、陳隋の時真言未だ来らざると雖も、大師手印の義を悟る。凡情を以てこれを疑ふべからず。所以に左右を邪正と云ふ時、尤も此の難有り。今は爾しかのみならず。左を止と云ひ、右を觀と云付。印は定慧寂照の義也。

故に定静を以て慧の覚観を押し止する也。無作の定に依って施陀羅尼を得ル。明了の智印相を誤る文。此の定印の義尤も今の心地神呪の印に相合する也。一切念等と断ずるは慧即照也。一切諸縁等を断ずるは定即寂也。是即慧の定を説く義也。

②は密教の主旨である大日ノ定印についての質問についての回答に言及。

③『別行經抄下』

* 五大胎藏界は五輪成身の意也。是れ等は皆事を面と為して理を兼る意也。故に五大院釋に云ふ、両部理を面と為して兼ねる事、蘇悉地は事を面と為して理を兼ねとしかじか。即此の意也。

③ 五大胎藏界は五輪成身（ごりんじょうしん…地水火風空の五大）五輪をして、自身の五所に配して観想することの意なり。安然の釋に、両部理を面と為して兼ねる事。蘇悉地は事を面と為して理を兼ねと云う。両界を事と理（不二）に配している。

④『毘逝 別（上）』

* 灌頂瓶水事（●は梵字）

頭教に元品無明（がんぼんのむみょう・諸煩惱の元始としての無明、最も微細な根本としての無明。天台では、等覚の菩薩の最後心で、妙

覚智よつてのみ断ぜられる最後の無明）を断つ事は等覚智断か。天台宗大なる大なる大事也。而今支分生真言は●●也。此の普賢の印明を以て灌頂せしむこと、自ら頭教の談に通ずるか。然も等覚智を以てこれを断ずる也。但し其の智は妙覚智下りて加する也。

金剛薩埵は、大日所変事業成就の身也。是則妙覚の中等覚也。これに因りて瑜祇經行法には大日薩埵の身と成りて薩埵本尊身と成る。何尊の行法にも深く行ずる阿闍梨は此の仏眼大成就品次第を用いるべきの由、師師口伝也としかじか

次に八印を用いる事、また五大院和尚の意也。胎藏には秘密にしてこれを頭らかにせず。

金界には灌頂と曼荼羅とを分明に説き頭らかにせり。仍金界に准つて此の説を用ゆ。何ぞ況んや祖師此の説を常に用い給ふとしかじか

凡そ真言教の習は常に重點を用ゆ。重くこれを用いむ。全く教意に背くべからざるか。何ぞ況んや支分生一印を用いる時は、本尊灌頂作法もこれ無し。只だ大日の等覚智の瓶水を弟子頂上に灌ぎて即座に元品無明を断断せり。大覚朗然の位を証得せしむる也。これを以て灌頂の本意を為す。其の上また四智四行無所不至等の功德を重ねて灌ぎ頭さむ。専ら次第も其の理に相叶う。然るべきか。

次にまた兩説出来することは共にこれを棄てず。皆用ゆべき事に淺略深秘等の議出来せしむる也。而して我宗の至極大事、灌頂の大法に過ぎること無し。此の事に至り、二説思議難き也。

凡そ一滴水を頂上に灌ぐを、密教至極の灌頂と称して、秘教の本懐

これに在りとかじか 浅智人其の意を得ず。また信ぜざる也。悲しき哉悲しき哉。知るべし。出過語言道之●水を以て、我覚本不生之●の灰に灌ぐ。諸過解脱之火を得ること、因果之風を遠離すること、仏牙を虚空に萌すこと、究竟之仏果を証といふこと、是當教の至極也。疑網を致す勿れ。浅智仰ぎてこれを信ずべし。深智習ひてこれを悟るべし。重ねてこれを論ずるに、●字ノ方壇ハ大地也。

真俗二諦、正しき二報に依つて浄土穢土、界内界外、併せて此●字より出生せざることを無し。此●字之中に●●●●之四字有り。此●智火●字之中より出でて還て●字を焼く。以字焼字と云ふは是也。俗諦は有漏之迷状の萬法を悉く焼尽し訖れば、●字同體出世無漏の灰に成訖りぬ。此灰上に●字智水を以てこれを灌ぐ。解脱之風、空界を扇ぐの時、究竟成佛の種子忽ちに以つて生長せしむる也。

また今教には瑜祇経と別行経を以て至極と為る也。瑜祇経は両部肝心也。毘盧遮那別行経は蘇悉地肝心也。両部肝心といふは瑜祇経の仏眼大成就品に成身の行法を説けり。行位薩埵仏眼八字を用いる。此の四ヶ印明を以て七分行法を存す。其の功能広くこれを勘見すべし。胎藏の八字明に●字を加ふ。師資口伝秘に、何事かこれに如かんや。但し対記に分明也。大日變じて薩埵身を作り、薩埵また變じて佛眼部母身と成仏す。此の仏眼部母は則是胎藏界大日の身也。薩埵は両部を経歴し、事業身と成る也とかじか 此の仏眼部母身より十凝誡沙俱胝仏と出生するとかじか

師説云、此の出生する仏は釈迦金輪也とかじか 凡そ此の行法次第をを學びて真言教の教相生義を吉吉と心得知るべき也。胎藏は理曼荼羅とかじか 此の理は中台の大日●字の本源也。凡そ一切萬物、是より出生せざることを無く、出生の義を以て胎藏と名づく。即名詮かに自性といふはかくの如き名也。此の胎藏の●字の大日、金界の●字の大日を出生せしむ。是徒本地垂迹の源也。此の金大日先に事業身と現る。また還りて部母身と成る。此の仏眼は胎藏大日也。教時義云。胎大日また仏眼と名づくとかじか 已に其の義分明也。此の部母身より諸仏出生せり。是は釈迦金輪也とかじか 釈迦如来また金輪と名づく也

④灌頂受戒の儀式についての説明の中で、安然は「胎藏界は秘密にして外には顕れないが、金剛界は灌頂と曼陀羅をはつきりと説き明らかにする」という。また安然の『教時義（真言宗教時義問答）』に拠れば「胎藏界の大日如来をまた仏眼と名づく」としている。

⑤『毘逝 別（下）』

*胎藏金剛蘇悉地灌頂護摩等一切行、これを以て准知すべきとかじか 略抄

⑤「普賢延命入三摩地（さんまじ…悟りの境地）事」については、安然の「胎藏金剛菩提心義略問答抄」に拠るとする。これは「大正新

修大藏經（七五卷）「所収の同書卷四で確認でき、金剛界大日如來に對する五相成身を完成させて「即身成仏」を達成するという。

⑥ 『法華 別帖』

* 今一字金輪と云ふ尊は、大日釈迦を合成せしむ尊也。是則金剛界大日也。

仏眼と云ふは則胎藏大日也（教時義云、また仏眼と名づく）。此の合身を成就せしむは女身也。世諦の陰陽也。世界の天地なり。此の女身は何所より出生するや。虚空より出生す。仍虚空眼と云ふ、●字を以て種子と為す（或は●或は●）委論はこれ言語及び難し。

⑥④と同じく、「仏眼は胎藏界大日如來である」という。

⑦ 『四帖秘決』

* 四・八二「三種意生身事（私云。桂林房阿闍梨瑜等指示也）」

* 仰せて云く、件印昨今祖師抄物を披見するに、書付られたるは、教時義に元曉楞伽疏に引て云く、法身に二つ有り、一には自性法身、本有の法性也。二は意成法身、正覚成る時、一切法を以て自身と為す也としかじか これを以てこれを思ふ。五輪成身の意成身此の意に依るべきか

真言宗三種生身極大事なりと先師示す所也。仍頭教失するか（已上彼の抄物文也）

此の文を見てこれを案ずるに、秘教の意は、三種意生身といふは、三身の成身也と心得うべきか。所謂法身の成身、胎の五輪成身也

五輪成身を以て意生身と云事、入秘密曼荼羅品の義釋に見たり。虚心記これを引く

報身の成身、金の五相成身也

報仏成道を以て本故と為す也。仍一往義相叶うか

心身の成身、所謂各各別尊一部の成身也。頭教の意は無漏界に生ずるの時、三諦の理觀に依りて、其の三種を生ずる也。これを指して三の意生身と為す。是教義に通ずる也

真言教の意は、界内の身上に依りて三仏即身の成仏の觀諸教に關する所か。仰趣知略かくの如きのみ

私云、教時文広くこれを見るべし

⑦「三種意生身（しょうじん…諸仏菩薩が衆生濟度のために、通力によつて仮に現す肉身）事」について、安然の『教時義（真言宗教時義問答）』に拠るとして、「法身（胎藏の五輪成身）・報身（金剛の五相成身）・心身（各別尊一部の成身）」の三種を同書卷一で論じている。

以上、五大院安然（『教時義』『略抄』を含む）に関わる主要記事を取つてみたが、もちろん、その他に、雙林寺僧正（全支）（『四帖秘決』一・七七、二・三九、二・六六）・聖昭（同二・八、四・八六）・觀性法橋（同二・八、二・二四、四・一）など叡山の伝燈の灌頂相承に関わる人物の名

前も見えることを付け加えておきたい。

四 慈円における受法と『法華 別帖』

さて五相成身・以字焼字ともに金剛界胎藏界之大日如来のことなので、このあたりで慈円の密教伝受の軌跡を整理してみたい。

①養和二年1182二月八日戌刻於白河房甘露王院西妻隨中道房阿闍梨(晴暹)許可了

両部並蘇悉地初行了、其歳二十八、凡自十六歳受法、其年両界諸會行法等諳誦修行于今 不廢忘、於十七護摩初行了、其歳三部經陀羅尼集經等各伝受了

〔『観性法橋日記云』、『門葉記』(卷一二一)所収。慈圓全集では『受法之間雑日記(受 法日記)』末尾に付載)

〔『観性法橋日記云』⁹⁾〕という資料は、胎金両部及び蘇悉地につき許可灌頂を受けたという記事。慈円の師覚快法親王は病により道快への灌頂を中道房晴暹(せいせん)に委ね、親王入滅の翌年養和二年1182二月八日、許可灌頂を受ける。

②寿永元年1182壬寅十一月廿三日庚寅隨桂林房僧正(全玄)伝受許可事

同十二月六日壬寅傳兩壇灌頂 私云和尚今年御年廿八于時法印〔『受法之間雑日記』、『門葉記』(卷一二一)所収。慈圓全集では『受法日記』

〔『受法之間雑日記(さつにつき)』¹⁰⁾〕という資料は、多分に変則的な灌頂に関する記事である。兄兼実は桂林院僧正全玄が道快の師ではないと知りながら、道快灌頂の相談を進め、覚快入滅後の翌年の寿永元年(五月改元)1182十一月廿三日に重ねて許可灌頂を受ける。

③自嘉応二年1170三月廿二日始之

密教經典・儀軌・立印(一覽、寿永元年までに二百十五種の伝受)〔『傳受日記』、『門葉記』(卷一〇六)所収)

*養和二年1182二月八日三部許可奉受了

養和二年二月廿三日布字八印四玄印等奉受了
寿永元年壬寅十一月廿三日庚寅許可

同十二月壬寅両部灌頂

已上隨桂林房僧正(全玄)奉受了、彼師伝受面受等

大日經第一卷 同十八日奉受了

同第二三卷 同十九日奉受了

同第五六卷 同廿日奉受了

已上大日經以池上阿闍梨(皇慶)御本奉受了、花軸也、此門流例也

「傳受日記」¹¹という資料に拠ると、嘉応二年1170三月廿二日から始められた密教經典の儀軌（ぎき・作法・規則）や立印（りゅういん）…初心の真言行者に念誦次第を伝受する段階）の一覧が記され、寿永元年までに二百十五種の伝受を受けている。そこには、三部經の秘所を池上（皇慶）御本を以て奉受したとか、桂林院僧正（全玄）に随つて兩部灌頂を伝受許可されたという記事があるが、「華頂要略門主伝」にはこの全玄に拠る灌頂伝受という記事しか無い。

以上、慈円の密教に関する記事が多いように感じるが、止観（頭教）・遮那（真言）の兼習を教学の課程とする叡山の伝燈からすれば、慈円における法華經研究も疎かである筈もない。多賀宗準に拠れば、慈円の法華研究の立場は「凡真言教相至極愚案之所及、記此雙紙也、雖法花一法義理為秘教三部開悟得此心可見之」「凡如此議皆是先師口決也、三昧深秘口決等皆所見也」などを併せみれば、その法華研究が真言密教の立場に立つものといふ。¹²

そこで『法華 別帖』という慈円の法華研究に関する著述に沿って見ることにしたい。『法華 別帖』は續天台宗全書（密教3）に拠る。特に断らない限り、以下同様。

予二十一歳春（安元元年1175）。一部八軸誦誦之後。則始法華行法既三十一年。于今未退転一萬日過了。毎日誦經一品。及三十歳之比。於一部通利者頗廢亡。然而今年（元久二年1205）五十一

歳。慥經三十一年也。今有此開悟。非冥加哉。可信可信可仰可仰。南無釈迦牟尼如来。又釈迦弥陀一仏之開悟。後得夢告同所信也耳

右の文章は、慈円の法華研究を纏めているような性格を持つ。慈円は二一歳春から元久二年五一歳まで約三〇年に亘つて法華經八軸の誦・讀誦などに努めている。毎日一品ずつ誦經して三〇歳といひますので、かなりの研鑽ぶりと言へる。なお慈円は承安四年1174江文寺に参籠して法花練行（百日）したのが二〇歳、翌々年には無動寺に登り千日入堂を始めている。

以下に掲げた記事は『法華 別帖』から重要な記事を抜粋したもので、特に断らない限り同書に拠る。

①三昧阿闍梨（良祐）云く、法華を読み奉るの時、先ず三業を浄め、次に禮仏真言、次に偈を勧請（随喜を闕く、これを入るべし）

②或は壞二乗心真言を以て補闕に用いるべきか。已上の記甚だ以て殊勝、甚だ深く甚だ深く、摩訶甚深

文治第二歳秋此の記を付けて妙經を読み奉る。九月中旬、偈頌真言等これを書出す。外見に及ぶ勿れ、努力努力

③凡そ真言教の教相の至極は、愚案の及ぶところ、此の雙紙に記す也。法花一法と雖も、義理秘教三部の開悟の為に、此の心これ見るべし。

④已上の次第、御社（山王七社）に於て法花法を修するの時、此の次第を用いんと欲しこれを私に書く。未曾有の書也。

⑤今一字金輪と云ふ尊は、大日釈迦を合成せしむ尊也。是則金剛界大日也。

仏眼と云ふは則胎藏大日也（教時義云、また仏眼と名づく）此の合身を成就せしむは女身也。世諦の陰陽也。

⑥*長日勤行事

右受南岳餘流朝修法花三昧為讀誦一乘妙典也、為慈覺末弟子夕勤西方懺法、為唱彌陀名號也（『大懺法院條々起請事』）

凡そかくの如き議皆先師（良祐）口決也。三昧深秘口決等皆見る所也。

*長日勤行事

右南岳余流朝修法花三昧を修し一乘妙典を讀誦する也。慈覺末弟子として夕に西方懺法を勤め、弥陀名号を唱うことを為す也。

⑦懺法院を建立の後に、毎年勤と為して如法七ヶ日夜法花法を修せしめんと欲す。仍元久二年十二月八日之を始め了りぬ。件の法上中下の番三十人之中、密宗之人高位之輩、替替て大壇護摩壇等を修め、顯宗人不断經（毎日間断な読む經）衆と為す。予開白す。此の時此の法を

深く思惟するの間、日来安立之上、行法護摩等行用大略開悟了りぬ。凡そ大略四種之釋の中、浅略深秘に於いては、常に知る所之分際皆浅深有る也。今稟承（伝統的な方法）の上に私案を加え深く勤行（ごんぎょう）す。右記す所は秘中深秘也。其の旨右の如く相違すべからず。今また開悟に依つて左に記す所は秘中深秘也。恐れと為す、恐れと為す。

⑧問。此觀曼荼羅を以て入三摩地とする。常の行法の義には似ざるか如何

答。凡そ三摩地に入るといふは、本尊行者同體の觀也。胎藏五輪成身満足句を念ず。金界五相成身觀身を本尊と為す。是皆三摩地に入る也。此の成身皆道場觀以前に三摩地に入らしむ也。両部の軌の心、胎には四所輪布字百光王等後にまたこれ在り。金には五相成身の外また別に三摩地無しと也。胎は一往は先ず修因向果行法也。仍五輪成身は、先ず性得の本有の理性を觀了後に、修得の布字の觀これ在り。但し此の胎にも從本垂迹の義有り。此の時は四所輪布字八印等遍知院の前にこれを結ぶ也としかじか

金は元より從本垂迹の行法也。仍念誦前に別入三摩地無し。別尊の法の時、種子三形を觀じて根本印所に別に入三摩地を用ゆ。是は行者の所觀の心得易き為、一途の説を用來也。

*凡そ真言宗の曼荼羅の義に略して二種有り。一には從本垂迹の曼

荼羅。是は一切諸仏の内証外化の三蜜也。釈迦の一代もまた此の中に攝す。諸宗此に就いて種種の行を釋す。(安然『教時間答』)

*師(皇慶)曰く、金界は是自性究竟成道の時の説也。其の曼荼羅は即成道の相也。故に従本垂迹曼荼羅と云ふ也。胎界は是成道の後に行者の為に修行の方軌を説く。故に従因向果の曼荼羅と云ふ也。胎藏金剛兩部の法は是法花經の本迹二門の意也。胎藏迹門は則理界也。金剛は本門即智界也。理界智界の名は法花の本迹二門に依つて也。故に法花の軌は即兩界の意を兼ねる也。是則本迹二門の意也(已上師説也)。今案するに迹門の中には開三頭一を説く。これを聞くに、三根の声聞無明の惑を破り中道の理を顕す也。故に迹門の中には多く理を詮ずる也。本門の中には如来の壽命海を説くを旨と為す。即是報身の恵命也。故に本門は多く智也(また云く、これを勘えるべし)(長宴『四十帖決』)

*真言を名といふは、真は真諦を謂ふ、言は属地を謂ふ。即真俗二諦也。真は言語道断心行所滅真如の理を謂ふ也。此の真如理中には言説に有るべからず。今衆生の為故に真理中より仮に言説出す。故に真言と云ふ。即仏は真に依つて言を出る。衆生は言に依つて真に入る也(同『四十帖決』)

⑨仍教主釈尊滅を唱えて利生弥陀薬師等の仏菩薩に譲る。真実には其

の仏菩薩と云ふは、一仏界の分身異名にて而も利生門をば説き給ふ也。これに依つて先ず今の法に付けこれを案す。大日には金剛薩埵、是普賢大士、法華體也

阿弥陀(釈迦也)には觀世音、是娑婆の無畏てへり。また法花の體也

修行門には薩埵を以て本と為す。利生體には觀音を以て體と為す。是則重重の本有の功德皆以て一同也。密かに入りて修行す。小けの縁にあらず。頭に付けて開悟す。眼前人界の利生也。これに依つて先ず日本国聖徳太子救世觀音也(如意輪)。我山にはまた慈惠大僧正(觀音也)、六十餘国一切靈所觀音を以て本尊と為す

此の悟りを得ての後、必ず二乗成仏。

*三・六六「法花行法事」

また法花行法に日來思ふ様は、經の惣の真言といふものものあらまほしく覚えて未だ思得ざりしに、去比案得る旨あり。觀音の真言を法花經の真言には用ふべくよき也

而して我本尊なればと思ひて不空縞索を用る也。其れに今一重興有る事を隆聖僧都が物語を聞きて思ひ合ひたり。東寺に二間の觀音供として毎月に長者の禁中参りて修する事あんなり。是は弘法大師の始めて修せしめ給ふたりけり。其れを近代の長者等、つやつやと何の觀音といふ事習傳せずして、様様に推してこれを修す。隆聖此の事を傳えたり。如意輪也としかじか これを聞きて我思

ふ様は如意輪といふ輪を主上の御本尊と定めらるにこそありけれ。三壇の長日御修法に如意輪其の一也。などは日来かくの如きは心得けるぞ。金輪聖主の御本尊の観音には如意輪観音也

さて我は昔より一天泰平萬民安穩の為に法花法を修する。國主に奉る為には如意輪真言。執柄のためには不空羂索の呪を念誦して法花法をば修する也としかじか

⑩今大日釈迦乃至普賢觀音等のかくの如きの悟りの智慧の身と云ふは、文殊師利菩薩是也。これに依つて在世にも彌勒文殊に問ふて疑網を除く。文殊の般若智を以て、三十年の間法花の機をば調熟せしむる也。仍一切如来の覚母と云ふ也。不動尊は此世尊の菩提心の所現也。菩提心と云ふ物は一切衆生今更発すべくにあらず。本有不変の仏性の心也。而して諸魔諸障妨げらる。輪廻六道四生也。此の魔障を除滅すれば、自然に本有菩提心は顯得する也。此の魔を除滅す。是不動摩訶薩の體也。大日如来此の體質を現して本有菩提心を開發せり

①三昧阿闍梨(良祐)は青蓮院門跡覺快法親王の師にあたる行玄の師であり、法華の密教的行法を修するにあたり、その三昧阿闍梨良祐の説に拠つたとされている。良祐の名は⑥にも見られるが、②法華經を讀誦するにあたり、法華行法を説いている。多賀宗隼は、慈円の法花研究が真言密教の立場に立つものとしているが、⑥補足とした「大懺法院條々起請事」にも、「南岳(高野山)余流を受け、法花三昧を

修すること、一乘妙典(法華經)を讀誦するため也」としているのである。

それらを承けて、③法華行法は秘教三部開悟のためであるとし、④では山王七社に於いて法花法を修する方法次第を述べる。

⑦には大懺法院を建立後に、毎年の勤として如法七ヶ日夜に法花法を修せしむという。密宗・顯宗それぞれの弟子に対して、護摩を修するもの、不斷經讀衆(大般若經・最勝王經・法華經など)に充て、全部で三十人の僧を修法に列せしめたこと。また、四種の釋として、浅略・深秘・秘中深秘・秘秘中深秘を明らかにしているが、大懺法院の法花法は、稟承の法に私案を加えて、秘秘中深秘の法を行ずる事に言及している。

⑧は入三摩地に至る両部曼荼羅について述べたもので、真言の「真」は真諦、「言」は俗諦、つまり長宴『四十帖決』にいうように、真俗二諦であるとする。真は言語道斷・心行所滅の世界なので言葉に表しにくいので、真言という。それに対して、衆生はすぐ真理に繋がらないので、言葉を手掛かりに仏の世界に結びつこうとする。言い換えれば、仏と衆生を繋ぐものとして真言があるとも言える。

その胎金両部曼荼羅を以て入三摩地ということについては、修因向果・従本垂迹という用語を使って説明したい。つまり本有の仏性の上に修得の布字観があるとし、金剛界の五相成身觀と胎藏界の五輪成身觀の相即に拠つて成仏するに至ると説く。

こうした考えは彼独自のものではなく、慈円以前の言わば叡山の伝

燈と言うべく、後に掲げた安然「教時間答」や長宴「四十帖決」などにも同様の思考が展開されている。

⑨は顕密一致相即を説いたもので、慈円は叡山の徒として法花を尊重する立場を示している。同時に、慈円の法花法は如意輪観音を本尊として、その真言を以てその方法とすることが分かる。後に引いた「法行法事」（『四帖秘決』）にあるように、国王のためには如意輪観音、執柄である撰闋家のためには不空羅索観音を本尊とするものであったことが分かる。

結びに代えて

以上、慈円の思想内容は、当たり前のことだが、叡山の伝燈に則つて「止観・遮那（顕教・密教）」兼習であったのである。しかも五大院安然の説を濃厚に継承している様子が看取できる。なかなか真言密教や台密関係の書は難解であったが、本百首に関して考えると、「略秘贈答和譚百首」として秘中深秘の計画を立てた。それが「日吉七社」に献ずるにあたり、法花法などを中心の企画に変更していったと考えることが出来るよう。

次の一首はその当初の「略秘贈答和譚百首」の名残と考えられないだろうか。

行をこなふに真の言をならばは心こころに月の宿やどらざらまし（略秘贈答和譚

百首三五九九

〈注〉

- (1) 拙稿「慈円の『二諦一如』についての考察」（和歌文学会六月例会・日本女子大学）口頭発表。なお、コレージュ・ド・フランスでの講義「*Jiens's Poetry and Tendai Dogmatics*」に基づき、「拾玉集」所収百首歌の序・跋に見る『歌論』考・慈円『厭離欣求百首』検証」と三部作となす。
- (2) 拙稿「慈円『建暦三年日吉百首』考」（徳島文理大学文学論叢2号・昭60）↓「慈円和歌論考」笠間書院・平10。なお、その両百首の中間に書陵部蔵「慈円百首」（150・363）という個々の伝本が介在していることにも言及している。
- (3) 三千院圓融蔵「秘相承集」は「續天台宗全書（密教3）」に拠るが、特には書写與書は見えない。多賀宗準「慈円著『毘盧遮那別行経私記』について」（日本学士院紀要19巻1号）参照。
- (4) 吉水蔵「毘逝 別」は「續天台宗全書（密教3）」に拠る。卷上末尾に「承元三年己巳六月。於西山草庵。書之了」という書写與書が記されている。また表紙に「極、深、秘、秘、」と見える。
- (5) 吉水蔵「法華別帖」は「續天台宗全書（密教3）」に拠る。長きにわたつて書き継がれたもの。表紙に「秘秘中深秘也。穴賢穴賢不可見」と記される。
- (6) 青蓮院蔵「四帖秘決」は「續天台宗全書（密教3）」に拠る。巻頭に「鎮和尚御口伝 慈賢筆 篇目道覚親王真蹟也」という記述が見える。
- (7) 叡山南溪蔵「自行私記」は「八深秘」ともいい、多賀宗準「法橋観性について ―とくに慈円との関係―」（歴史地理90巻1・昭36↓「慈円の研究」）参照。

文治六年十一月日、為成仏欲修此行法、仍為暗（語カ）誦書之、努々穴賢、非機人借謬莫令見知之、南无金剛薩埵、返々守護給、此行法大日

經不説之、瑜祇經仏眼品雖説之、猶於委細秘而不明之、只師資口伝也、哀哉々々、慈覺大師十三代師資口伝、大日如來三密修行、成仏之期在近、可思之、私云、自大成就品出修行此法之時、仏眼種智真空冥寂如來如美、知見三界之相、無有生之故也、即身成仏一生妙覺之真因、只可在此行法、深可信仰、終焉之時、敢不可廢之、金剛仏子慈一

但し、著書には右の跋文は省略されており、またこの叡山南溪藏本は曼殊院本に拠つて「文治六年二月」と修正すべきと記されている。

(8) 吉水藏「本尊縁起」は、末尾に「小僧出家受戒之後、・及七旬」「太上天皇自十一歳御元服之時、今令四十宝算給也」とあり、起草者は慈円、承久元年の著作であることは確実である。

(9) 「観性法橋日記」は「續天台宗全書(密教3)」「門葉記」(卷二二二)所収。「慈圓全集」付載資料では、「受法之間雜日記」末尾に付載されている。

(10) 「門葉記」(卷二二二)所収。多賀宗準「慈圓全集」付載資料には「受法日記」と記されている。

(11) 「門葉記」(卷二〇六)所収。多賀宗準「慈圓全集」付載資料には「傳受日記」と記されている。

(12) 多賀宗準「慈圓の研究」第二部第四章「修行と信仰形成」参照。

※使用した資料は次の通り。

慈円の著述『秘経抄』『秘相承集』『別行経抄』『毘逝別』『法華別帖』『四帖秘決』は「續天台宗全書(密教3)」に、その他必要に応じて、多賀宗準『慈圓全集』『慈圓の研究』所載の資料などに拠る。

安然『教時諍』『教時諍論』『真言宗教時義問答(教時義・教時間答)』は「大正新修大藏經(七五卷)」「天台宗叢書」、

同『胎藏金剛菩提心義略問答抄』は「大正新修大藏經(七五卷)」、

同『金剛峯楼閣一切瑜祇修行法』は「天台宗叢書」、

長寛『四十帖決』は「大正新修大藏經(七五卷)」、

その他の仏教書は「大正新修大藏經」に拠る。

「付記」本稿は平成三十年度仏教文学会大会で「慈円の『二諦一如』についての追考」という題で講演したものである。その場で重要な御指摘を戴いた先学の皆様には御礼申し上げます。

SummaryConsideration of Jien's *Ryakuhī-Zoutou-Hyakushū*

Hajime ISHIKAWA

[Key words]

